

フランドン農学校の豚

宮沢賢治

〔冒頭原稿一枚？なし〕

以外の物質は、みなすべて、よくこれを摂取して、
脂肪若くは蛋白質となし、その体内に蓄積す。」とこう
書いてあったから、農学校の畜産の、助手や又小使な
どは金石でないものならばどんなものでも片つ端から、
持つて来てほうり出したのだ。

尤もこれは豚の方では、それが生れつきなのだし、
充分によくなれていたから、けしていやだとも思わ
なかつた。却つてある夕方などは、殊に豚は自分の幸
福を、感じて、天上に向いて感謝していた。というわ
けはその晩方、化学を習った一年生の、生徒が、自分

の前に来ていかにも不思議そうにして、豚のからだを眺めて居た。豚の方でも時々は、あの小さなそら豆形の怒ったような眼をあげて、そちらをちらちら見ていたのだ。その生徒が云った。

「ずいぶん豚というものは、奇体なことになっている。水やスリッパや藁をたべて、それをいちばん上等な、脂肪や肉にこしらえる。豚のからだはまあたとえば生きた一つの触媒だ。白金と同じことなのだ。無機体では白金だし有機体では豚なのだ。考えれば考える位、これは変になることだ。」

豚はもちろん自分の名が、白金と並べられたのを聞

いた。それから豚は、白金が、一匁いちもんめ三十円することを、よく知っていたものだから、自分のからだに二十貫で、いくらになるということも勘定かんじょうがすぐ出来たのだ。豚はびたつと耳を伏せふせ、眼を半分だけ閉じて、前肢まえあしをきくつと曲げながらその勘定をやったのだ。

20 × 1000 × 30 = 600000 実に六十万円だ。六十万円といったならそのころのフランドンあたりでは、まあ第一流の紳士しんしなのだ。いまだってそうかも知れない。さあ第一流の紳士だもの、豚がすっかり幸福を感じ、あの頭のかげの方の鮫さめによく似た大きな口を、にやにや曲げてよろこんだのも、けして無理とは云われない。

ところが豚の幸福も、あまり永くは続かなかつた。

それから二三日たつて、そのフランドンの豚は、ど
さりと上から落ちて来た一かたまりのたべ物から、(大
学生諸君、意志を鞏固きようこにもち給え。たまいいかな。)たべ物
の中から、一寸ちよつと細長い白いもので、さきにもじかい毛
を植えた、ごく率直そつちよくに云うならば、ラクダ印の
齒磨楊子はみがきようじ、それを見たのだ。どうもいやな説教で、折
角洗礼を受けた、大学生諸君にすまないが少しこらえ
てくれ給え。

豚は実にぎよつとした。一体、その楊子の毛をみる
と、自分のからだ中の毛が、風に吹ふかれた草のよう、

ザラツザラツと鳴ったのだ。豚は実に永い間、変な顔して、眺めていたが、とうとう頭がくらくらして、いやないやな気分になった。いきなり向うの敷藁しきわらに頭を埋めてくるつと寝てしまったのだ。

晩方になり少し気分がよくなつて、豚はしずかに起きあがる。気分がいいと云つたつて、結局豚の気分だから、苹果りんごのようにさくさくし、青ぞらのように光るわけではもちろんない。これ灰色の気分である。灰色にしてややつめたく、透明とうめいなるところの気分である。さればまことに豚の心もちをわかるには、豚になつて見るより致いたし方ない。

外来ヨークシャイヤでも又黒いバクシャイヤでも豚は決して自分が魯鈍ろどんだとか、怠惰たいだだとかは考えない。最も想像に困難なのは、豚が自分の平らなせなかを、棒でどしやつとやられたとき何と感ずるかということだ。さあ、日本語だろうか伊太利亜語イタリアだろうか独乙語ドイツだろうか英語だろうか。さあどう表現したらいいか。さりながら、結局は、叫び声以外わからない。カント博士と同様に全く不可知なのである。

さて豚はずんずんふと肥り、なんべんも寝たり起きたりした。フランドン農学校の畜産学の先生は、毎日来ては鋭すまじい眼で、じつとその生体量を、計算しては帰って

行つた。

「も少しきちんと窓をしめて、室中暗くしなくては、へやじゆう脂あぶらがうまくかからんじやないか。それにもうそろそろと肥育をやってもよかろうな、毎日阿麻仁を少しずつやつて置いて呉れないか。」教師は若い水色の、上着の助手に斯う云つた。豚はこれをすっかり聴いた。そして又大へんいやになつた。楊子のときと同じだ。折角のその阿麻仁も、どうもうまく咽喉のどを通らなかつた。これらはみんな畜産の、その教師の語気について、豚が直覚したのである。(とにかくあいつら二人は、おれにたべものはよこすが、時々まるで北極の、空のよ

うな眼をして、おれのからだをじつと見る、実に何ともたまらない、とりつきばもないようなきびしいころで、おれのことを考えている、そのことは恐い、あ、恐い。豚は心に思いながら、もうたまらなくなり前の柵さくを、むちやくちやに鼻で突つつ突いた。

ところが、丁度その豚の、殺される前の月になって、一つの布告がその国の、王から発令されていた。

それは家畜撲殺同意調印法といい、誰たれでも、家畜を殺そうというものは、その家畜から死亡承諾書しやうだくしよを受け取ること、又その承諾証書には家畜の調印を要すると、こう云う布告だったのだ。

さあそこでその頃は、牛でも馬でも、もうみんな、殺される前日には、主人から無理に強いられて、証文にペタリと印を押したもんだ。ごくとしよりの馬などは、わざわざ蹄鉄をはずされて、ぼろぼろなみだをこぼしながら、その大きな判をぱたつと証書に押しただ。

フランドンのヨークシャイヤも又活版刷りに出来ているその死亡証書を見た。見たというのは、或る日のこと、フランドン農学校の校長が、大きな黄色の紙を持ち、豚のところによって来た。豚は語学も余程進んでいたのだし、又實際豚の舌は柔らかかで素質も充分

あつたのでごく流暢りゆうちやうな人間語で、しずかに校長に挨拶あいさつした。

「校長さん、いいお天気でございます。」

校長はその黄色な証書をだまって小わきにはさんだまま、ポケットに手を入れて、にがわらいして斯こう云つた。

「うんまあ、天気はいいね。」

豚は何だか、この語ことばが、耳にはいって、それから咽喉のどにつかえたのだ。おまけに校長がじろじろと豚のからだを見ることは全くあの畜産の、教師とおんなじことなのだ。

豚はかなしく耳を伏せた。そしてこわごわ斯う云つた。

「私はどうも、このごろは、気がふさいで仕方ありません。」

校長は又にがわらいを、しながら豚に斯う云った。

「ふん。気がふさぐ。そうかい。もう世の中がいやになつたかい。そういうわけでもないのかい。」豚があんまり陰気な顔をしたものだから校長は急いで取り消しました。

それから農学校長と、豚とはしばらくしいんとしてにらみ合つたまま立っていた。ただ一言も云わないで

じいつと立つて居おつたのだ。そのうちにととうとう校長は今日は証書はあきらめて、

「とにかくよくやすんでおいで。あんまり動きまわらんでね。」例の黄いろな大きな証書を小わきにかいこんだまま、向うの方へ行つてしまふ。

豚はそのあとで、何べんも、校長の今の苦笑やいかにも底意のある語ことばを、繰くり返し繰くり返しして見て、身ぶるいしながらひとりごとした。

『とにかくよくやすんでおいで。あんまり動きまわらんでね。』一体これはどう云う事か。ああつらいつらい。豚は斯う考えて、まるであの梯形ていけいの、頭も割れるよう

に思った。おまけにその晩は強いふぶきで、外では風がすさまじく、乾いたカサカサした雪のかけらが、小屋のすきまから吹きこんで豚のたべものの余りも、雪でまっ白になったのだ。

ところが次の日のこと、畜産学の教師が又やって来て例の、水色の上着を着た、顔の赤い助手といつものするどい眼付して、じつと豚の頭から、耳から背中から尻尾^{しっぽ}まで、まるでまるで食い込むように眺めてから、尖^{とが}った指を一本立てて、

「毎日阿麻仁^{あまに}をやつてあるかね。」

「やつてあります。」

「そうだろう。もう明日だって明後日あさってだって、いいんだから。早く承諾書をとれあいなんだ。どうしたんだろう、昨日校長は、たしかに証書をわきに挟はさんでこっちの方へ来たんだが。」

「はい、お入りのようでした。」

「それではもうできてるかしら。出来ればすぐよこす筈はずだがね。」

「はあ。」

「もう少し室へやをくらくして、置いたらどうだろうか。それからやる前の日には、なんにも飼料しりょうをやらなくて。」

「はあ、きつとそう致します。」

畜産の教師は鋭い目で、もう一遍いっぺんじいつと豚を見てから、それから室を出て行つた。

そのあとの豚の煩悶はんもんさ、（承諾書というのは、何の承諾書だろう何を一体しろと云うのだ、やる前の日には、なんにも飼料をやっちゃいけない、やる前の日って何だろう。一体何をされるんだろう。どこか遠くへ売られるのか。ああこれはつらいつらい。）豚の頭の割れそうな、ことはこの日も同じだ。その晩豚はあんまりに神経が興奮し過ぎてよく睡ねむることができなかつた。ところが次の朝になつて、やつと太陽が登つた頃、寄

宿舎の生徒が三人、げたげた笑って小屋へ来た。そして一晩睡らないで、頭のしんしん痛む豚に、又もや厭いやな会話を聞かせたのだ。

「いつだろうなあ、早く見たいなあ。」

「僕ぼくは見たくないよ。」

「早いといいなあ、囲とって置いた葱ねぎだって、あんまり
永こいと凍こつちまう。」

「馬鈴薯ばれいしょもしまつてあるだろう。」

「しまつてあるよ。三斗としまつてある。とても僕たち
だけで食べられるもんか。」

「今朝けさはずいぶん冷たいねえ。」一人が白い息を手に

吹きかけながら斯う云いました。

「豚のやつは暖かそうだ。」一人が斯う答えたら三人共どつとふき出しました。

「豚のやつは脂肪でできた、厚さ一寸の外套がいでうを着てるんだもの、暖かいさ。」

「暖かそうだよ。どうだ。湯気さえほやほやと立っているよ。」

豚はあんまり悲しくて、辛つらくてよろよろしてしまふ。「早くやつちまえばいいな。」

三人はつぶやきながら小屋を出た。そのあとの豚の苦しき、(見たい、見たくない、早いといい、葱が凍る、

馬鈴薯三斗、食いきれない。厚さ一寸の脂肪の外套、
おお恐い、ひとのからだをまるで観透みとおしてるおお恐い。
恐い。けれども一体おれと葱と、何の関係があるだろ
う。ああつらいなあ。その煩悶の最中に校長が又やつ
て来た。入口でばたばた雪を落して、それから例のあ
いまいな苦笑をしながら前に立つ。

「どうだい。今日は気分がいいかい。」

「はい、ありがとうございます。」

「いいのかい。大へん結構だ。たべ物は美味おいしいか
い。」

「ありがとうございます。大へんに結構でございま

す。」

「そうかい。それはいいね、ところで実は今日はお前と、内内相談に来たのだがね、どうだ頭ははつきりかい。」

「はあ。」豚は声がかすれてしまう。

「実はね、この世界に生きてるものは、みんな死ななけあいかんのだ。実際もうどんなもんでも死ぬんだよ。人間の中の貴族でも、金持でも、又私のような、中産階級でも、それからごくつまらない乞食こじきでもね。」

「はあ、」豚は声が咽喉につまって、はつきり返事ができなかつた。

「また人間でない動物でもね、たとえば馬でも、牛でも、にわとり鶏でも、なまずでも、バクテリアでも、みんな死ななけあいかんのだ。蜉蝣かげろうのごときはあしたに生れ、夕ゆうべに死する、ただ一日の命なのだ。みんな死ななけあならないのだ。だからお前も私もいつか、きつと死ぬのにきまつてる。」

「はあ。」豚は声がかすれて、返事もなにもできなかつた。

「そこで実は相談だがね、私たちの学校では、お前を今日まで養って来た。大したこともなかったが、学校としては出来るだけ、ずいぶん大事にしたはずだ。お

前たちの仲間もあちこちに、ずいぶんあるし又私も、まあよく知っているのだが、でそう云つちや可笑しいが、まあ私の処としろぐらい、待遇たいぐうのよい処はない。」

「はあ。」豚は返事しようと思つたが、その前にたべたものが、みんな咽喉へつかえててどうしても声が出て来なかつた。

「でね、実は相談だがね、お前がもしも少しでも、そんなようなことが、ありがたいと云う気がしたら、ほんの小さなたのみだが承知をしては貰もらえまいか。」

「はあ。」豚は声がかすれて、返事がどうしてもできなかつた。

「それはほんの小さなことだ。ここに斯う云う紙がある、この紙に斯う書いてある。死亡承諾書、私儀永々御恩顧の次第に有之候儘、御都合により、何時にても死亡仕るべく候年月日フランドン畜舎内、ヨークシャイヤ、フランドン農学校長殿とこれだけのことだがね、」校長はもう云い出したので、一瀉千里にまくしかけた。

「つまりお前はどうせ死ななけあいかないからその死ぬときはもう潔く、いつでも死にますと斯う云うことで、一向何でもないことさ。死ななくてもいいうちは、一向死ぬことも要らないよ。ここの処へただ

ちよつとお前の前肢まえあしの爪印つめいんを、一つ押しておいて貰いたい。それだけのことだ。」

豚は眉まゆを寄せて、つきつけられた証書を、じつとしばらく眺ながめていた。校長の云う通りなら、何でもないがつくづくと証書の文句を読んで見ると、まったく大へんに恐こわかった。とうとう豚はこらえかねてまるで泣声でこう云った。

「何時にてもということは、今日でもということですか。」

校長はぎくつとしたが気をとりなおしてこう云った。「まあそうだ。けれども今日だなんて、そんなことは

決してないよ。」

「でも明日でもというんでしょう。」

「さあ、明日なんていうよう、そんな急でもないだろう。いつでも、いつかというような、ごくあいまいなことなんだ。」

「死亡をするということは私が一人で死ぬのですか。」
豚は又金切声で斯うきいた。

「うん、すっかりそうでもないな。」

「いやです、いやです、そんならいやです。どうしてもいやです。」豚は泣いて叫んだ。

「いやかい。それでは仕方ない。お前もあんまり恩知

らずだ。犬猫ねこにさえ劣おとったやつだ。」校長はふんぷん怒り、顔をまっ赤にしてしまい証書をポケットに手早くしまい、大股おおまたに小屋を出て行つた。

「どうせ犬猫なんかには、はじめから劣っていますよ。う。わあ」豚はあんまり口惜くやしさや、悲しさが一時にこみあげて、もうあらんかぎり泣きだした。けれども半日ほど泣いたら、二晩も眠らなかつた疲れつかが、一ぺんにどつと出て来たのでつい泣きながら寝ね込んでしまふ。その睡ねむりの中でも豚は、何べんも何べんもおびえ、手足をぶるつと動かした。

ところがその次の日のことだ。あの畜産の担任が、

助手を連れて又やって来た。そして例のたまらない、目付きで豚をながめてから、大へん機嫌きげんの悪い顔で助手に向つてこう云つた。

「どうしたんだい。すてきに肉が落ちたじゃないか。これじゃまるきり話にならん。百姓ひやくしやうのうちで飼かつたつてこれ位にはできるんだ。一体どうしたてんだらう。心当りがつかないかい。頬肉ほおにくなんかあんまり減つた。おまけにシヨウルダアだつて、こんなに薄うすくちやなつてない。品評会へも出せあしない。一体どうしたてんだらう。」

助手は唇くちびるへ指をあて、しばらくじつと考えて、そ

れからぼんやり返事した。

「さあ、昨日の午後ごごに校長が、おいでになっただけでした。それだけだったと思います。」

畜産の教師は飛び上る。

「校長？　そうかい。校長だ。きつと承諾書を取ろうとして、すてきなぶまをやったんだ。おじけさせちやったんだな。それでこいつはぐるぐるして昨夜一晩寝ないんだな。まずいことになったなあ。おまけにきつと承諾書も、取り損そとねたにちがいない。まずいことになったなあ。」

教師は実に口惜しそうに、しばらくキリキリ歯を鳴

らし腕うでを組んでから又云った。

「えい、仕方ない。窓をすっかり明けて呉くれ。それから外へ連れ出して、少し運動させるんだ。む茶くちやにたたいたり走らしたりしちやいけないぞ。日の照らない処ところを、厩舎きゅうしやの陰かげのあたりの、雪のない草はらを、そろそろ連れて歩いて呉れ。一回十五分位、それから飼料をやらないで少し腹はらを空すかせてやれ。すっかり気分が直つたらキャベジのいい処ところを少しやれ。それからだんだん直つたら今まで通りにすればいい。まるで一ヶ月の肥育を、一晩で台なしにしちまった。いいかい。」

「承知いたしました。」

教師は教員室へ帰り豚はもうすっかり氣落ちして、ぼんやりと向うの壁かべを見る、動きも叫びもしたくない。ところへ助手が細い鞭むちを持って笑つて入つて来た。助手は囲いの出口をあけごく町寧ていねいに云つたのだ。

「少しご散歩はいかがです。今日は大へんよく晴れて、風もしずかでございます。それではお供いたしましたよ、う。」ピシツと鞭がせなかに来る、全くこいつはたまらない、ヨークシャイヤは仕方なくのそのそ畜舎を出たけれど胸は悲しきでいっぱい、歩けば裂きけるようだった。助手はのんきにうしろから、チツペラリーの

口笛くちぶえを吹ふいてゆっくりやって来る。鞭もぶらぶらふつている。

全体何がチツペラリーだ。こんなにわたしはかなしいのにと豚は度々たびたび口をまげる。時々は

「ええもう少し左の方を、お歩きなさいましては、いかがでございますか。」なんて、口ばかりうまいことを云いながら、ピシツと鞭を呉れたのだ。（この世はほんとうにつらいつらい、本当に苦の世界なのだ。）こてつとぶたれて散歩しながら豚はつくづく考えた。

「さあいかがです、そろそろお休みなさいませ。」助手は又一つピシツとやる。ウルトラ大学生諸君、こんな

散歩が何で面白いだろう。からだの為も何もあつたものじゃない。

豚は仕方なく又畜舎に戻りごろつと藁に横になる。キヤベジの青いい所を助手はわずか持つて来た。豚は喰べたくなかつたが助手が向うに直立して何とも云えない恐い眼で上からじつと待つている、ほんとうにもう仕方なく、少しそれを嚙じるふりをしたら助手はやつと安心して一つ「ふん。」と笑つてからチツペラリーの口笛を又吹きながら出て行つた。いつか窓がすつかり明け放してあつたので豚は寒くて耐らなかつた。

こんな工合くあいにヨークシャイヤは一日思いしずに沈みながら三日を夢ゆめのように送る。

四日目に又畜産の、教師が助手とやって来た。ちらつと豚を一眼見て、手を振りながら助手に云う。

「いけないいけない。君はなぜ、僕の云った通りしなかった。」

「いいえ、窓もすっかり明けましたし、キャベジのいのもやりました。運動も毎日丁寧ていねいに、十五分ずつやらしています。」

「そうかね、そんなにまでもしてやって、やつぱりうまくいかないかね、じゃもうこいつは瘠やせる一方なん

だ。神経性營養不良なんだ。わきからどうも出来やしない。あんまり骨と皮だけに、ならないうちにきめな
くちや、どこまで行くかわからない。おい。窓をみな
しめて呉れ。そして肥育器を使うとしよう、飼料をど
しどし押し込んで呉れ。麦のふすまを二升とね、
阿麻仁あまにを二合、それから玉蜀黍とうもろこしの粉を、五合を水でこ
ねて、団子にこさえて一日に、二度か三度ぐらいに分
けて、肥育器にかけて呉れ給え。たま肥育器はあつたら
う。」

「はい、ございます。」

「こいつは縛しばって置き給え。いや縛る前に早く承諾書

をとらなくちや。校長もさつぱり拙ますいなあ。」

畜産の教師は大急ぎで、教舎の方へ走つて行き、助手もあとから出て行つた。

間もなく農学校長が、大へんあわててやって来た。豚は身体からだの置き場もなく鼻で敷藁ほを掘つたのだ。

「おおい、いよいよ急がなきゃならないよ。先頃せんころの死亡承諾書ね、あいつへ今日はどうしても、爪判を押して貰いたい。別に大した事じゃない。押して呉れ。」

「いやですいやです。」豚は泣く。

「厭いやだ？ おい。あんまり勝手を云うんじゃない、その身体からだは全体みんな、学校のお陰で出来たんだ。これ

からだつて毎日麦のふすま二升阿麻仁二合と玉蜀黍の粉五合ずつやるんだぞ、さあいい加減に判をつけ、さあつかないか。」

なるほど斯^こう怒^{おこ}り出して見ると、校長なんというものは、實際恐いものなんだ。豚はすっかりおびえて了^{しま}い、

「つきます。つきます。」と、かすれた声で云つたのだ。「よろしい、では。」と校長は、やつとのことに機嫌^{きげん}を直し、手早くあの死亡承諾書の、黄いろな紙をとり出して、豚の眼の前にひろげたのだ。

「どこへつけばいいんですか。」豚は泣きながら尋ねた^{たず}。

「ここへ。おまえの名前の下へ。」校長はじつと眼鏡めがね越しに、豚の小さな眼を見て云った。豚は口をびくびく横に曲げ、短い前の右肢みぎあしを、きくつと挙げてそれからピタリと印をおす。

「うはん。よろしい。これでいい。」校長は紙を引っぱって、よくその判を調べてから、機嫌を直してこう云った。戸口で待っていたらしくあの意地わるい畜産の教師がいきなりやって来た。

「いかがです。うまく行きましたか。」

「うん。まあできた。ではこれは、あなたにあげて置きますから。ええ、肥育は何日ぐらいかね。」

「さあいずれ模様を見まして、鶏やあひるなどと、きつと間違ちがいなく肥ふとりますが、斯かう云う神経過敏かびんな豚は、或あるいは強制肥育では甘うまく行かないかも知れません。」

「そうか。なるほど。とにかくしつかりやり給え。」

そして校長は帰って行つた。今度は助手が変てこな、ねじのついたズツクの管と、何かのバケツを持って来た。畜産の教師は云いながら、そのバケツの中のものちよつとを、一寸つまんで調べて見た。

「せいじや豚を縛つて呉れ。」助手はマニラロープを持って、囲いの中に飛び込んだ。豚はばたばた暴れたがとうとう囲いすみの隅にある、二つの鉄の環わに右側の、

足を二本共縛られた。

「よろしい、それではこの端を、咽喉へ入れてやって呉れ。」畜産の教師は云いながら、ズツクの管を助手に渡す。

「さあ口をお開きなさい。さあ口を。」助手はしずかに云ったのだが、豚は堅く歯を食いしばり、どうしても口をあかなかつた。

「仕方ない。こいつを噛ましてやって呉れ。」短い鋼の管を出す。

助手はぎしぎしその管を豚の歯の間にねじ込んだ。豚はもうあらんかぎり、怒鳴ったり泣いたりしたが、

とうとう管をはめられて、咽喉の底だけで泣いていた。助手はその鋼の管の間から、ズツクの管を豚の咽喉まで押し込んだ。

「それでよろしい。ではやろう。」教師はバケツの中のものを、ズツク管の端の漏斗じょうつうに移して、それから変な螺旋らせんを使い食物を豚の胃に送る。豚はいくら呑のむまゝいとしても、どうしても咽喉で負けてしまい、その練つたものが胃の中に、入ってだんだん腹が重くなる。これが強制肥育だった。

豚の気持ちの悪いこと、まるで夢中むちゆうで一日泣いた。

次の日教師が又来て見た。

「うまい、肥ふとった。効果がある。これから毎日小使と、二人で二度ずつやって呉れ。」

こんな工合でそれから七日というものは、豚はまるきり外で日が照っているやら、風が吹いてるやら見当もつかず、ただ胃が無むやみ暗に重苦しくそれからいやに頬ほおや肩かたが、ふくらんで来ておしまい息をするのもつらくらい、生徒も代る代る来て、何かいろいろ云つていた。

あるときは生徒が十人ほどやって来てがやがや斯こう云つた。

「ずいぶん大きくなつたなあ、何貫ぐらいあるだろ

う。」

「さあ先生なら一目見て、何百目まで云うんだが、おれたちじやちよつとわからない。」

「比重がわからないからなあ。」

「比重はわかるさ比重なら、大抵水と同じだろう。」

「どうしてそれがわかるんだい。」

「だって大抵そうだろう。もしもこいつを水に入れたら、きつと沈みも浮びもしない。」

「いいやたしかに沈まない、きつと浮ぶにきまつてる。」

「それは脂肪のためだろう、けれど豚にも骨はある。」

それから肉もあるんだから、たぶん比重は一ぐらいだ。」

「比重をそんなら一として、こいつは何斗あるだろう。」

「五斗五升はあるだろう。」

「いいや五斗五升などじゃない。少く見ても八斗ある。」

「八斗なんかじゃきかないよ。たしかに九斗はあるだろう。」

「まあ、七斗としよう。七斗なら水一斗が五貫だから、こいつは丁度三十五貫。」

「三十五貫はあるな。」

こんなはなしを聞きながら、どんなに豚は泣いたろう。なんでもこれはあんまりひどい。ひとのからだを
枘ますではかる。七斗だの八斗だのという。

そうして丁度七日目に又あの教師が助手と二人、並ならんで豚の前に立つ。

「もういいようだ。丁度いい。この位まで肥つたらまあ極度だろう。この辺だ。あんまり肥育をやり過ぎて、一度病氣にかかってもまたあとまわりになるだけだ。丁度あしたがいいだろう。今日はもう飼えさをやらなくて。それから小使と二人してからだをすっかり洗って

呉れ。敷藁しきわらも新らしくしてね。いいか。」

「承知いたしました。」

豚はこれらの問答を、もう全身の勢力で耳をすまして聴きいて居た。(いよいよ明日だ、それがあの、証書の死亡ということか。いよいよ明日だ、明日なんだ。一体どんな事だろう、つらいつらい。)あんまり豚はつらいので、頭をゴツゴツ板へぶつつけた。

そのひるすぎに又助手が、小使と二人やって来た。そしてあの二つの鉄環てつわから、豚の足を解いて助手が云う。

「いかがです、今日は一つ、お風呂ふろをお召めしなさいま

せ。すっかりお仕度したくができて居ます。」

豚がまだ承知とも、何とも云わないうちに、鞭むちがピシツとやって来た。豚は仕方なく歩き出したが、あんまり肥ってしまつたので、もううごくことの大儀たいぎなこ
と、三足で息がはあはあした。

そこへ鞭むちがピシツと来た。豚はまるで潰つぶれそうになり、それでもようよう畜舎の外まで出たら、そこに大きな木の鉢はちに湯が入つたのが置いてあつた。

「さあ、この中にお入りなさい。」助手が又一つパチツとやる。豚はもうやつとのことで、ころげ込むこようにしてその高い縁ふちを越こえて、鉢の中へ入つたのだ。

小使が大きなブラッシをかけて、豚のからだをきれいに洗う。そのブラッシをチラツと見て、豚は馬鹿のように叫んだ。というわけはそのブラッシが、やつぱり豚の毛でできた。豚がわめいているうちからだがすっかり白くなる。

「さあ参りましょう。」助手が又、一つピシツと豚をやる。

豚は仕方なく外に出る。寒さがぞくぞくからだに浸みる。豚はとうとうくしゃみをする。

「風邪を引きますぜ、こいつは。」小使が眼を大きくして云った。

「いいだろうさ。腐くさりがたくて。」助手が苦笑して云つた。

豚が又畜舎へ入ったら、敷藁敷藁がきれいに代えてあつた。寒さはからだを刺すようだ。それに今朝からまだ何も食べないので、胃ももうからになつたらしく、あらしのようにゴウゴウ鳴つた。

豚はもう眼もあけず頭がしんしん鳴り出した。ヨークシャイヤの一生の間のいろいおそろな恐ろしい記憶きおくが、まるきり廻まわり燈籠とうろうのように、明るくなつたり暗くなつたり、頭の中を過ぎて行く。さまざまな恐ろしい物音を聞く。それは豚の外で鳴つてるのか、あるいは豚の

中で鳴ってるのか、それさえわからなくなった。そのうちもういつか朝になり教舎の方で鐘かねが鳴る。間もなくがやがや声がして、生徒が沢山たくさんやって来た。助手もやっぱりやって来た。

「外でやろうか。外の方がやはりいいようだ。連れ出して呉れ。おい。連れ出してあんまりギーギー云わせないようにね。まずくなるから。」

畜産の教師がいつの間にか、ふだんとちがった茶いろなガウンのようなものを着て入口の戸に立っていた。

助手がまじめに入ってくる。

「いかがですか。天気も大変いいようです。今日少し

ご散歩なすつては。」又一つ鞭をピチツとあてた。豚は全く異議もなく、はあはあ頬ほおをふくらせて、ぐたつぐたつと歩き出す。前や横を生徒たちの、二本ずつの黒い足が夢ゆめのように動いていた。

俄にわかにカツと明るくなつた。外では雪に日が照つて豚はまぶしさに眼を細くし、やつぱりぐたぐた歩いて行つた。

全体どこへ行くのやら、向うに一本の杉すぎがある、ちらつと頭をあげたとき、俄かに豚はピカツという、はげしい白光のようなものが花火のように眼の前でちらばるのを見た。そいつから億百千の赤い火が水のように

に横に流れ出した。天上の方ではキーンという鋭いすりと音が鳴っている。横の方ではごうごう水が湧わいている。さあそれからあとのことならば、もう私は知らないのだ。とにかく豚のすぐよこにあの畜産の、教師が、大きな鉄槌てつづいを持ち、息をはあはあ吐はきながら、少し青ざめて立っている。又豚はその足もとで、たしかにクンクンと二つだけ、鼻を鳴らしてじつとうごかなくなっていた。

生徒らはもう大活動、豚の身体からだを洗った桶おけに、も一度新らしく湯がくまれ、生徒らはみな上着そでの袖を、高くまくって待っていた。

助手が大きな小刀で豚の咽喉のどをザクツと刺しました。一体この物語は、あんまり哀れ過ぎるのだ。もうこのあとはやめにしよう。とにかく豚はすぐあとで、からだを八つに分解されて、厩舎きゅうしやのうしろに積みあげられた。雪の中に一晚漬つけられた。

さて大学生諸君、その晩空はよく晴れて、金牛宮もきらめき出し、二十四日の銀の角、つめたく光る弦月げんげつが、青じろい水銀のひかりを、そこらの雲にそそぎかけ、そのつめたい白い雪の中、戦場の墓地のように積みあげられた雪の底に、豚はきれいに洗われて、八きれになって埋うずまった。月はだまって過ぎて行く。夜は

いよいよ^さ冴えたのだ。

底本…「新編 風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

2001（平成13）年4月25日14刷

底本の親本…「新修宮沢賢治全集」筑摩書房

入力…久保格

校正…林 幸雄

2003年8月8日作成

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。